

私は、千田町1丁目の千寿会会長も務めさせていただいております、大野賢一と申します。本日はこのような場での機会を頂き、誠にありがとうございます。私が住んでいるのは、ロイヤルホスト、金光教がある区画です。

私は79歳になります。大野家の歴史を少しさかのぼると大正の中頃、愛媛県から広島へ出てきたようです。現在の、情報プラザの南角、道を挟んで北角の家を借りて昭和17年まで住んでおりました。私はそこで生まれ、3歳頃に南区宇品へ転居しました。

私が被爆したのは宇品、県病院より南へ800mの所でした。当時は標的になるのを避けるため、学校で授業は行われておらず、民間の倉庫を借りて授業を受けていたように記憶しています。借りたばかりの倉庫の片づけや掃除をしていた時でした。私は水汲み係で、道路にある手押しポンプから水を汲んでおりました。その時、B29の機影3機を見たのです。

機体に陽の光が反射し、ピカピカ光ながら飛ぶB29が視界に入ったとたん、ピカ、ドーンです。小学1年生だった私は、とっさの時は親指で耳をふさぎ、指で目を覆い隠して伏せるよう学校の先生から教えてもらっていました。突然、目の前の家のおばさんの悲鳴が聞こえました。「ガラスがたった。ガラスがたった。」窓から飛び出し、伏せていた私の上を飛び越えられました。頭が真っ白になりました。

その時一緒にいた付添いの先生や友達のことは一切わかりません。そのガラスがたったおばさんについて近くの防空壕に行きました。おばさんが上半身着物を脱いで、背中にささった無数のガラスを抜いてもらうのを、ただ見ておりました。

どれくらい時間がたったのか分かりませんが、防空壕の入口で声が聞こえました。

「賢一はおらんか。賢一はおらんか。」父の声です。なんと嬉しかったことか。県病院やその近くを5、6か所、必死で探し歩き私を見つけてくれたのでした。

父は大工でしたから勤労奉仕の花形です。建物疎開などで家を解体する指導者でした。あの日も仕事で出かけるはずでしたが、ワイシャツにアイロンがかかってないことにはぶてたらしいのです。そのまま勤労奉仕を欠勤し助かったのです。家族五人とも全員無事でした。家は県病院より南へ200～300mの所にあり、父に手を引かれながら家に帰るまでの道端には、中心地より引き上げられた人々が座り込んでおられました。似島に逃げ渡る人たちもおられたようです。電信柱は曲がりくねり、電線は垂れ下がり、家々はガタガタでした。火は出ていませんでした。

ここからは少し明るい記憶になります。

家に帰ると母が待っていていました。「もうどうせ死ぬんじゃけえ。」と言って、どこからか米櫃を出してきたのです。ありったけの米を炊いて握り飯を作ってくれたのです。忘れもしません。大きな、それも純米だけの握り飯です。あまりの嬉しさにすぐ口に入れることができず、当分手の中に握りしめていました。

その頃は食べるものがなく、配給で配られるものといっても鉄道草で作った草団子です。今思うと、人の食べるものではありません。でも、並んだのです。

記憶に残っているのは近所のおばさんにもらった干しバナナです。その切り方が面白いので

す。おばさんは器用にまき糸で切ってくれました。とてもおいしかったです。

近所に中学生のお姉さんが二人おられました。あの日も勤労奉仕に出ていて、無事帰ってこられました。しかし、二日もすると様子が変わります。子ども心の興味本位で植え込みの陰から治療される様子を見に行ったのです。八月の暑い最中です。ハエがたかり不衛生で痛々しい様子でした。それから一週間経った頃でしょうか、顔が紫色に変わり、まん丸に膨らんでいました。私は子ども心に傷付き、見ることはできません。今思うと、それから原爆の事に関して見聞きすることを避けるようになりました。

私は 25 歳で結婚し、現在の住まいへ移り 54 年になります。
ふりかえりの塔を知ることになったのは、今から 30 年前です。その時、私の原爆（体験）とふりかえりの塔の違いが分かったのです。私が被爆した南区宇品は中心より 3 km。千田町は中心より 1.5 km です。爆心地から近いので爆風で木造の家屋はほとんど一瞬にして倒壊。しかし、30 分は火災もなかったそうです。

何とか倒壊した建物から這い出て、吉島の飛行場に逃げたんですよと話を聞いたことがあります。30 分後頃からは火災が起こり、家の梁の下敷きになった家族を助けたくてもどうすることもできません。助けようと駆け寄ったものの人力ではどうしようもなく見殺しです。
「私はいいから逃げてくれ」その声を聞きながら、泣く泣くその場を去らなければならなかった人々。まさに地獄です。

そんな悲惨なありし日のことを思い出して、爆死者皆さんに肉親の近くで安らかに眠り下さいとの思いで建設されたふりかえりの塔。発起人の方々のご心中はいかばかりであったことかと思います。

私は、当時低学年で記憶も定かでないところもありますが、これだけは言えます。
原爆は、人の体も心もずたずたにします。この世にあってはならないものです。

ご清聴ありがとうございました。

2018 年 7 月 28 日

大野 賢一